

なること、善人であること、地位や肩書がある者のみが生きる権利があるかのような社会を作り上げてしまいました。要は、人間の力と可能性を前提に構築された世の中だったのです。その人間至上主義、人間万能主義にほころびが生じてきているということでしょう。「人間が…」「自分が…」という自己中心的な発想から、「人間に」「自分に」かけられた多くのいのちの願いとはたらきと、その恩恵を見てゆく発想へ…。「自力から他力へ」の逆転発想が今こそ必要なのだと思います。現に、私たちは大地によって支えられ、あらゆるいのちのつながりの中で生かされています。そのいのちはまた、生死を超えてはるかにつながっているのです。実は、この近現代社会が見失っていたいのちの連携とおかげさまの心を、如実に説いているのが浄土真宗という仏教なのです。

もつとも、昔は、多くの日本人がそう思って暮らしていたと言えるでしょう。今もそう思って暮らしている田舎の人びとも大勢おられることでしょう。そうした田舎のおばあちゃんが私たちに伝えておきたいことが、本書の中身です。その意味で、都会の人びとと故郷のおじいちゃんおばあちゃんとの橋渡しになれば、こんな有り難いことはありません。

近代思想が日本人の精神世界に特異な形で浸透し、その中から形成されてきた宗教への偏見と固定観念をひとまず脇に置いて、この100の問いに向き合ったとき、自ずと見えてくるものがあるはずです。それは時と所を超えて輝くものにほかなりません。それこそ